

保育者アイデンティティの形成過程

大野 和男（児童学科・准教授）・小泉 裕子（児童学科・教授）

問題

保育者養成の学科で学ぶ学生は、大学入学時において、ある程度将来の職業選択の方向性を持ち、入学してくる。しかし、実際には、それが明確になるには、大学における様々な経験が重要な意味を持つことであろう。保育者を目指す上で、保育に対して明確なイメージを持ち、子どもにどのように接するかを意識することは重要であり、保育職を目指す上で、学生のうちに保育者としてアイデンティティを確立していくことが必要である。小泉・田爪（2005）は、保育者養成校におけるカリキュラムが将来の進路に深く結びついているため、その中で保育者としての知識や技術を習得していくと同時に「保育者である自分」と向き合い、保育者である自己を自覚し成長することが課題であるこの過程を保育者志望学生における「保育者アイデンティティ」の過程と呼んだ。

このいわゆる「保育者アイデンティティ」の確立にとって、教育実習や保育実習といった現場での経験が重要な役割を果たすと思われる。田爪・小泉（2006）は、保育者養成校のカリキュラムにおける「保育者アイデンティティ」の確立について、授業における模擬保育の効果について検討している。それによると、保育者アイデンティティが確立傾向にある学生は、模擬保育の実践はもちろん、保育そのものにポジティブなイメージを持ち、保育者としての自己を向上させている姿が見られるが、他方拡散傾向にある学生は、保育の持つ多様性に対して困惑するが、それを克服しようとする意識が低いために、模擬保育において自分らしさを生かすことが困難であった結果、保育者アイデンティティの拡散状態に陥っていることを指摘している。このことに関して、田爪（2012）は、初めての保育実習を経験した大学3年生150名に対して質問紙調査を実施し、実習における指導保育者イメージや実習中に感じた不安、就業意識の志望進路による差異を検討している。それによると、保育職志望者は、昇進や社会的地位の向上に対する思考や、仕事に対して自発的、挑戦的取り組みようとする志向が強く、保育者としての自信の喪失における規定因は志望進路によって異なることを明らかにしている。

また、谷川（2010）は、幼稚園実習におけるリアリティ・ショックとリアリティ・ショックにともなう学生の保育に関する認識の変容プロセスを検討している。リアリティ・ショックを伴う問題状況における学生の認識の変容には、「子ども理解の発展」「ショックからの回避」というどちらか2つのプロセスを経ることを見いだしている。学生がどちらのプロセスをたどるかは実習先の保育者との出会いのあり方に規定されており、そのあり方が実習内容の質に大きな影響を与えることを明らかにしている。これに関して、田爪・小泉（2009）は、保育者を対象として質問紙調査を実施し、指導保育者の持つ実習生に対するイメージについて検討している。その結果、保育者が実習生を受容しているか否かが保育者の持つ実習生のイメージおよび実習生に対する不安に影響を与えていること、実習生に基礎的な保育技量があるか否かが保育者における実習生に対する困難さの主な要因である

ことを明らかにしている。保育指導者は、実習生に対して、保育者としての基本的な態度や保育技量は実習前に、子どもへ関わる力量は実習の中で獲得することを期待していたが、保護者との関わり、環境構成、発達に問題を持つ子どもへの対応は就職後の課題として認識していた。

これらの先行研究を概観すると、学生が実習を経験していく中で「保育者アイデンティティ」の深まりを示していくことは明らかである。では、学生は、数回の実習を経験していくわけであるが、どのような道筋を通して「保育者アイデンティティ」を確立していくのであろうか。このことを検討するためには、縦断的に検討することが必要であると思われる。その前提として、今回の中間報告では、「保育者アイデンティティ」の形成について、実習経験前の学生（1・2年生）、と実習経験後の学生（3・4年生）の比較検討を行う。さらに、実習を経験した後の学生を対象とし、実習の意味づけに違いがあるのかについても検討を行った。

方法

1. 調査時期

2012年4月に行われた。

2. 対象者

K大学の保育者養成系の学科に属する女子学生481名（1年生160名、2年生146名、3年生133名、4年生42名）である。1・2年生は実習未経験であり、3年生は保育実習として保育所での実習1回と居住型施設での実習（各11日間）、4年生は3年生の実習に加え2回目の保育所での実習を行っている。教育実習は、どの学年も未経験である。学生には調査の趣旨を説明し、了解を得た。

3. 質問紙の構成

影響を受けた保育者のイメージ、子どものイメージ、実習に対する不安・心配、就職意識などで構成された。以上の項目は、各学年共通であるが、3・4年生には実習後の気持ちについても尋ねた。

結果

1. 学生全体の傾向

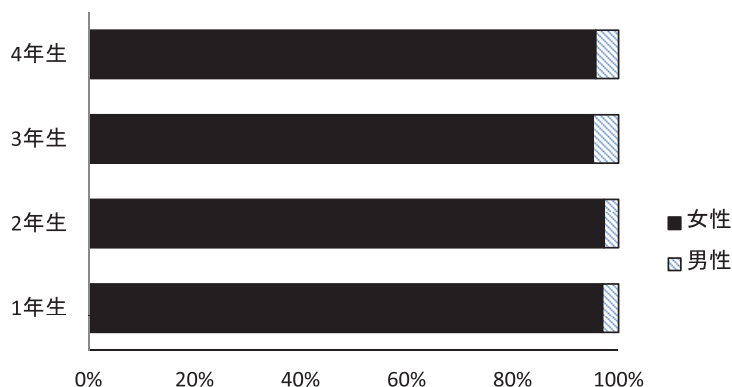


Figure 1. 影響を受けた保育者の性別

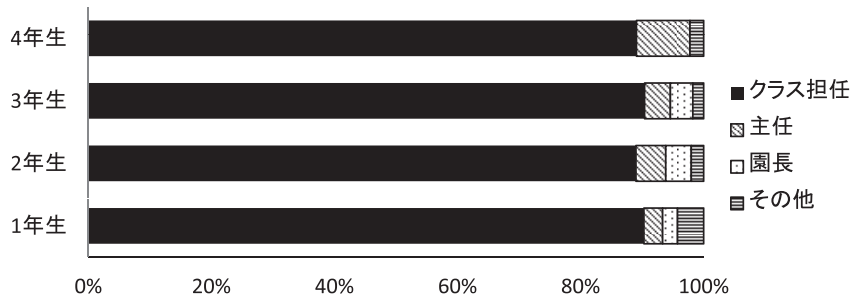


Figure 2. 影響を受けた保育者の役職

影響を受けた保育者に関して、その保育者が女性である場合が97.2%であり、担任という回答が89.9%を占めた (Figure 1)。その保育者のイメージについて、20対の形容詞によるSD法を用い、因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行った結果、4因子(累積寄与率: 54.83%)が得られた。第1因子から順に、「穏やかな性格」「活動性」「指導性」「計画性」と名づけた (Table 1)。

学年×因子による分散分析を行ったところ、どの因子においても、有意差が見られた。

Table 1. 「保育者のイメージ」に対する因子分析の結果

質問項目/因子負荷量	因子1	因子2	因子3	因子4
因子1: 「穏やかな性格」				
穏やかな感じ	0.854	-0.180	-0.178	0.018
優しい感じ	0.841	-0.024	-0.132	0.007
温かい感じ	0.572	0.245	0.087	0.094
受容的な感じ	0.537	-0.135	0.289	-0.214
幼児主体的な感じ	0.443	-0.064	0.286	-0.131
子ども好きな感じ	0.393	0.275	0.179	-0.018
子どもの視点に近い	0.341	0.082	0.283	0.000
因子2: 「活動性」				
活発な感じ	-0.196	0.723	0.066	-0.049
たのしい感じ	0.223	0.651	0.041	0.193
派手な感じ	-0.121	0.607	-0.142	0.066
明るい感じ	0.299	0.577	-0.088	-0.012
積極的な感じ	0.008	0.573	0.090	0.026
知的な感じ	0.014	-0.552	0.092	0.227
因子3: 「指導性」				
誠実な感じ	0.116	-0.192	0.699	-0.011
責任感が強い感じ	-0.227	0.124	0.658	0.132
安定した感じ	0.038	-0.066	0.643	-0.005
指導上手な感じ	0.101	0.137	0.488	0.017
慎重な感じ	-0.047	-0.148	0.399	0.325
因子4: 「計画性」				
管理的な感じ	-0.156	0.103	0.074	0.600
繊細な感じ	0.183	-0.339	-0.037	0.543
因子間相関				
		因子2	因子3	因子4
	因子1	0.173	0.448	0.301
	因子2		0.437	-0.183
	因子3			0.221

多重比較の結果、因子1・2は1年生と3年生、因子3は、2年生と4年生、3年生と4年生の間で有意差が見られた。因子4は、1年生と3・4年生の間で有意差が見られた。

また、就職についての意識に関して、因子分析（主因子法，プロマックス回転）により、累積寄与率が56.40%で4因子が抽出された（Table 2）。各因子は、第1因子：「上昇志向」、第2因子：「対人志向」、第3因子：「価値志向」、第4因子：「労働条件」と名づけられた。このうち、第1・4因子には、学年間で有意差は見られなかった。第2因子では、4年生と他の学年の学年との間に有意差が見られた。第3因子では、1年生と3・4年生の間に有意差が見られた（Figure 3）。

Table 2. 「就職についての意識」に対する因子分析の結果

	因子1	因子2	因子3	因子4
因子1：「上昇志向」				
地位や名誉をもたらす職業に就きたい	0.836	-0.015	-0.067	0.087
職場では昇進したり，高い役職につきたい	0.807	0.002	-0.007	-0.007
世間で名前の通った企業や団体に就職したい	0.774	0.045	-0.053	0.143
人と張り合えるような仕事がしたい	0.596	-0.048	-0.019	-0.198
因子2：「対人志向」				
周りの人とコミュニケーションをしながら行う仕事がしたい	-0.049	0.729	0.038	-0.11
常に多くの人との出会いがある仕事をしたい	0.061	0.724	-0.045	-0.12
個人よりも集団の努力が重視される仕事がしたい	-0.029	0.352	0.027	0.086
因子3：「価値志向」				
天職だと感じる仕事をしたい	-0.134	-0.072	0.721	0.031
社会的に有意義な仕事をしたい	0.004	0.029	0.606	-0.029
福利厚生が充実している職場で仕事がしたい	-0.024	0.155	0.412	0.217
因子4：「労働条件」				
経済的な余裕があれば，働きたくない	0.038	-0.14	0.109	0.566
休日が多く，勤務時間の短い仕事がしたい	0.149	-0.029	0.161	0.503
自立生活に必要な程度の給料は得られる仕事がしたい	0.068	0.205	0.229	0.32
自分の個性が活かせる仕事をしたい	0.076	-0.038	0.369	-0.405
誰かの案に従うのではなく自分で計画をたてる様な仕事がしたい	0.247	-0.053	0.198	-0.464
因子間相関				
		因子2	因子3	因子4
因子1		0.204	0.364	0.032
因子2			0.381	-0.214
因子3				-0.035

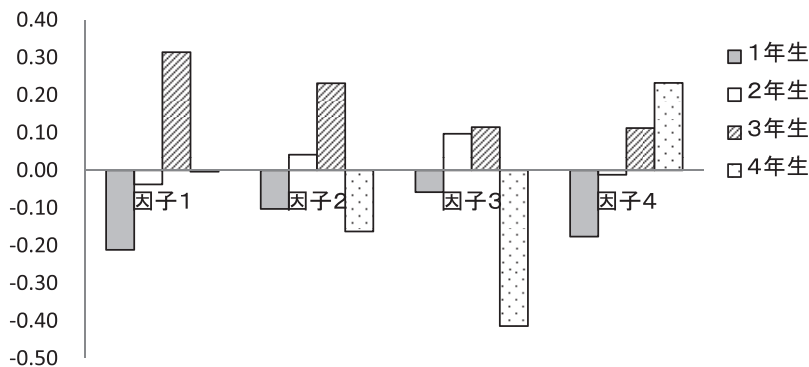


Figure 3. 「保育者イメージ」についての学年ごとの因子得点

2. 実習と就職意識

保育実習を経験した3・4年生のみを対象に、実習後の心のありようについての尺度を作成し、因子分析(主因子法, プロマックス回転)を行った結果、4因子が抽出された(累積寄与率: 60.88%)。4因子は、それぞれ、第1因子:「保育者モデルへの信頼」、第2因子:「実習の楽しさ」、第3因子:「保育者モデルへの不信」、第4因子:「実習の厳しさ」と命名することができた。これらの4因子は、第1・2因子と第3・4因子間で負の相関が見られた (Table 3)。

そこで、この4因子をもとにクラスター分析を行い、3・4年生を3群に分類した。3群は、それぞれFigure 4に示した。第1群(実習がポジティブな意味を持ち、楽しいだけでなく保育の大変さも実感している群)が最も多く、116名、第2群(実習に対してネガティブなイメージが強い群)が47名、第3群(保育に関して楽しかったという理解の浅い群が33名)であった。

この3群と就職意識について、一元配置分散分析を行ったところ、第1因子(上昇志向)についてのみ、両方群とネガティブ群の間に有意差が見られた。このことから、実習がポジティブな意味を持ち、楽しいだけでなく保育の大変さも実感している群、つまり、保育という仕事の重要性を理解している学生は、保育という職業についても、より深く考えるようになっていることがうかがえた。

Table 3. 「保育実習後の気持ち」に対する因子分析の結果

	因子1	因子2	因子3	因子4
因子1:「保育者モデルへの信頼」				
自分もその人のような保育者になりたいと思った	0.945	-0.083	0.060	0.012
もっとその人の指導を受け勉強したいと思った	0.876	-0.111	-0.003	-0.027
その先生のように専門性を身につけたいと思った	0.803	-0.002	0.138	0.016
先生は自分が保育者になる上で良いモデルとなった	0.771	-0.116	-0.160	-0.007
先生のおかげで保育者のイメージが明確になった	0.717	0.061	0.190	0.056
実習指導のおかげで実習のやりがいを感じた	0.545	0.173	0.012	-0.132
先生の指導で役に立つことがあった	0.513	0.080	-0.128	0.061
現場の実習指導体制は満足のものであった	0.386	0.205	-0.303	0.163
実習指導を受けることで勉強になった	0.359	0.273	-0.089	0.071
因子2:「実習の楽しさ」				
実習指導を受けることは面白かった	-0.013	0.970	0.127	0.172
実習指導を受けることは楽しかった	-0.017	0.964	0.057	0.042
実習指導を受けることは苦痛だった	-0.030	-0.352	-0.008	0.495
実習指導を受けて実習がつまらないと思った	-0.132	-0.373	0.149	0.262
因子3:「保育者モデルへの不信」				
先生の指導でよく理解できないことがあった	-0.095	0.266	0.721	0.022
先生の指導で迷惑だと思ったことがあった	0.154	0.062	0.823	-0.073
先生の指導について行けなかったと思った	-0.004	-0.179	0.637	-0.027
因子4:「実習の厳しさ」				
実習指導を受けることは大変だった	0.032	0.201	-0.049	0.737
実習指導を通してこの仕事は難しいと思った	0.109	0.113	-0.032	0.603
実習指導を受けることで自分の自信が無くなった	-0.079	-0.095	0.043	0.564
先生に本当の悩み等、相談しにくいときがあった	0.075	-0.176	0.370	0.155
因子間相関				
		因子2	因子3	因子4
因子1		0.609	-0.59	-0.301
因子2			-0.563	-0.444
因子3				0.511

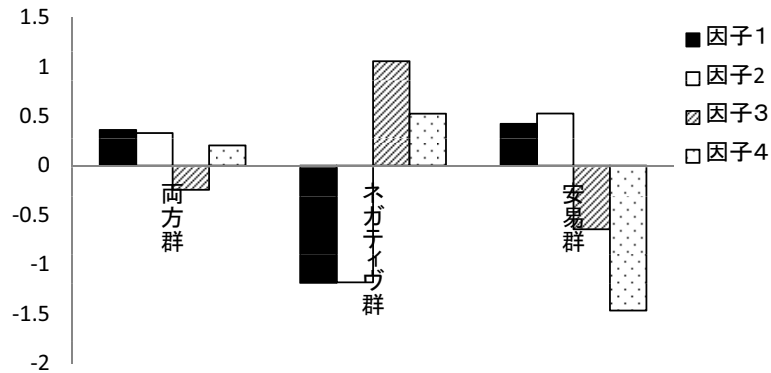


Figure 4. 各群の特徴

考察及び今後の課題

いくつかの因子分析の結果から、少なくとも1・2年生と3・4年生との間に「保育者アイデンティティ」の差があると思われる。それは、実習というものが重要な意味を持っていると推測される。

また、実習は、学生にとって、成功体験につながるか失敗経験になってしまうかによって、その後の保育に対する考え方に大きな意味を持つことが指摘できる。言い換えれば、「保育者アイデンティティ」の形成において、実習がプラスに作用する場合とマイナスに作用する場合があると思われる。

このことについては、縦断的に検討することによって、学生にとって、「保育者アイデンティティ」を形成していく上でどの時点が重要であり、何が影響を与え、どのように変化していくのかを考えていくことが必要であろう。

引用文献

- 小泉裕子・田爪宏二 2005 実習生の保育者アイデンティティの形成過程についての実証的研究：保育者モデルの影響と保育者アイデンティティ「私は保育者になる」の関連，鎌倉女子大学紀要，12，13-23.
- 田爪宏二・小泉裕子 2006 保育者志望学生の「保育者アイデンティティ」確立に関する検討：模擬保育の実践を通して，鎌倉女子大学紀要，13，27-38.
- 田爪宏二・小泉裕子 2009 実習担当保育者の持つ実習生のイメージと実習生に期待する資質に関する検討，鎌倉女子大学紀要，16，13-23.
- 田爪宏二 2012 保育者養成課程の大学生における保育実習の印象および就業意識の希望進路による差異：「保育者アイデンティティ」の確立の視点からの検討，鹿児島国際大学福祉社会学部論集，44-57.
- 谷川夏実 2010 幼稚園実習におけるリアリティショックと保育に関する認識の変容，保育学研究，48，2，202-212.

付記

本論文の一部は，日本保育学会第66回（2012年5月）大会において，発表された。